

二宮金次郎像に関する一考察

——明治天皇御用品から谷岡記念館まで——

田 崎 公 司

はじめに

二宮尊徳、通称金治郎（一七八七（天明七）年七月二三日生^①）が、その七〇年の生涯を閉じたのは、一八五六（安政三）年一〇月二〇日、明治改元の一二年前である。その死から五四年後の一九一〇（明治四三）年、最初の銅像が造られ、陸仁（明治）天皇に献上された。後に述べるようにこの銅像は鑄金師岡崎雪聲により製作され、東京彫工会に出品されたものである。そしてこの銅像は御用品として宮内省が購入、天皇の机上に置かれることとなった。

一方の二宮尊徳は、江戸時代末期の疲弊した農村の復興にその半生を傾け、全国で六〇〇を超える町村を立ち直らせた男であった。身長六尺（一・八メートル強）・体重二五貫（約九四キログラム）、日本人の体型が最も「貧弱化」した江戸末期においては、人並みはずれた大男

でもあった。尊徳は、封建社会が動揺した幕末期にあって、報徳仕法^②という独自の方法により農村復興事業に取り組んだ人物である。

しかし、尊徳について思い起こされるのは、全国各地の小学校の校庭に設置されている薪を背負う少年時代の「二宮金次郎像」に代表される姿である。尊徳が一体どのような人物なのかについては、「質素・「儉約」のみが強調され、その具体的中身については広く理解されていない。校庭に置かれた「金次郎像」は農氏指導者としての自信に満ち溢れた尊徳を伝えていない。そこに見られる金次郎像は、か弱い少年が薪を背負って読書する姿である。二宮尊徳のちに国定教科書に取り上げられ、小学校生徒の学ぶべき人物として偶像化される。戦前、少年金次郎の銅像が全国各地の小学校の校庭に建てられた。そして戦後の一時期、一転して彼の銅像は忌み嫌われ、顧みられなくなつてし

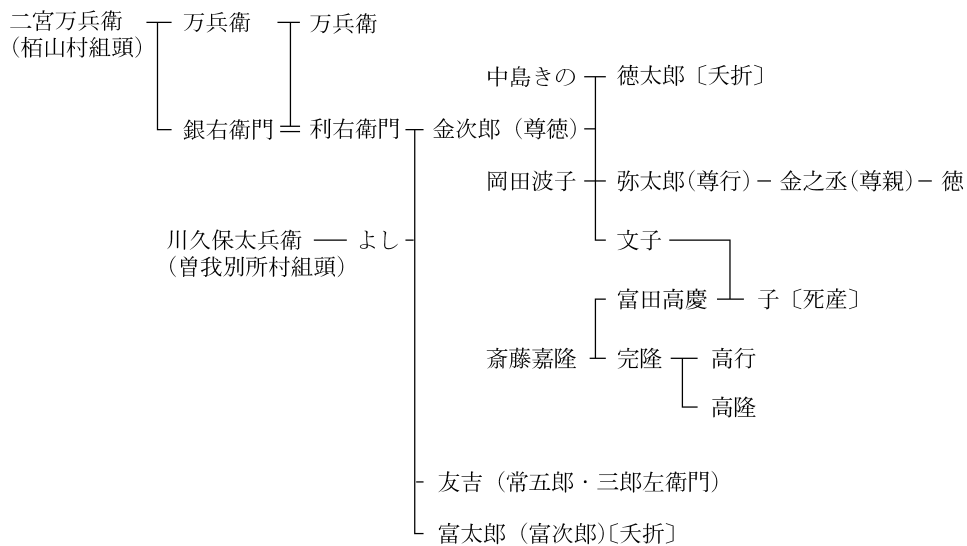
まった。国定教科書によって脚光を浴び、そして今や一部の人々には「日本封建制の権化」ように扱われたのが二宮尊徳であった。しかし、私たちが戦前戦後を通じて知っている人間・二宮尊徳像は、さほど正確なことだといえないのではなからうか。

翻って、我が大阪商業大学谷岡記念館前にも「負薪読書」姿の「二宮金次郎立像」が設置されている。本稿は、報徳仕法の実践者としての二宮尊徳から自律した「人格」もつに至った少年二宮金次郎像の形成を歴史的に考察し、本学の「二宮金次郎立像」建立の経緯についても若干の言及を意図するものである。

1 少年二宮金次郎像の形成

薪を背負った少年二宮金次郎像については、『報徳記』にある「鶏鳴に起て遠山に至り或は柴を刈り薪を伐り之を嚮き夜は繩を索ひ草鞋を作り寸陰を惜み身を勞し心を盡し母の心を安んじ二弟を養ふことにのみ勞苦せり。而して採薪の往返にも大学の書を懐にして途中歩みながら之を誦し少しも怠らず。是先生（二宮尊徳…引用者）に聖賢の学の初なり。道路高音にこれを誦讀するが故に人々怪み狂兒を以て之を目的するものあり」³⁾の記述を根拠にしているといわれる。『報徳記』全八巻は二宮尊徳の四大門人（富田高慶・斎藤高行・福住正兄・岡田良一郎）の筆頭であり、尊徳の一人娘である文子（松鄰・夕峰）の夫となった奥州相馬藩士富田高慶（二八一四〜一八九〇）による二宮尊徳研究の出発点となるその人物・思想と活動記録を記した伝記である。富田

【図1】二宮尊徳関係系図



出典：奈良本辰也『二宮尊徳』（岩波新書，1959年，18頁）に加筆。

高慶は、二宮尊徳死後、尊徳の息子である尊行（弥太郎）及び孫の尊親（金之丞・金一郎）を助けて、報徳仕法を指導した人物であった。特に戊辰戦争勃発後、尊行・尊親一家は、旧相馬藩領に移住し、その地に足跡を残している。^①【図1】の二宮尊徳関係系図を参照されたい。

ところで『報徳記』は、一八五〇（嘉永三）年頃から書き始められ、二宮尊徳死去直後の一八五六（安政三）年一月に脱稿したとされる。一八八〇（明治三）年に二代相馬藩主であった相馬充胤が上書を添えて明治天皇に天覧に供し、一八八三（明治一六）年に宮内省より発行、全国の知事に頒布された。のちに官吏用として一八八五（明治一八）年に農商務省版が、さらに一八九〇（明治二三）年に大日本農會版が出版されるに及んで広く一般に普及したものである。^②

そして一八九一（明治二四）年一〇月に刊行された『少年文学叢書第七編 二宮尊徳翁』（幸田露伴著、博文館）には初めて薪を背負った二宮金次郎像が挿絵として掲載された。奇しくも同年一月、尊徳に従四位が追贈されており、翌年には農商務省からの委託をうけて『秋日田家図』（幸野樸嶺作、薪を背負い本を読む少年が画の一端に描かれている）が作成されたのである。この絵は、シカゴ万国博覧会に出品されている。

二宮尊徳が注目されるようになったのは、明治一〇年代後半の「松方デフレ」期からであるが、一八九四（明治二七）年には内村鑑三が『Japan and Japanese』（民友社、一八九四年一月）に二宮尊徳伝を書いている。これは、一九〇八（明治四一）年に『Representative Men of

Japan』（警醒社書店、一九〇八年四月）と改題され、西郷隆盛（新日本の創設者）・上杉鷹山（封建領主）・中江藤樹（村の先生）・日蓮上人（仏僧）とともに、尊徳（農民聖者）を『代表的日本人』^③として扱ったものである。

その金次郎が国定の『尋常小学修身書』に登場したのは一九〇四（明治三七）年であった。^④以来、一九四五（明治二〇）年までは、明治天皇についてもっとも多く教科書にのり、その名は戦前社会の隅々まで浸透した。修身教科書には教授すべき徳目が決まっており、それらの徳目を説明するのにふさわしい人物をとりあげ、その人の生い立ち、行いを素材として小学生に日本人としてとるべき道を教える、という手法がとられる。金次郎は孝行・学問・勤勉・精励・節儉など、多くの徳を備えた人物として次々と逸話が創作された。とくに小学生を奮奮させたのは、金次郎のような貧乏な子ども、つまり自分でも、まじめに勉強し人の道を守るならば立身出世できる、という教えだったといわれる。この点、野口英世（清作）を想起させる。

教科書が少年期の金次郎だけにスポットを当てたのは、小学生の関心をひくためであったとしても、「勤儉」・「刻苦」・「精励」を最大の特長として讃めたたえたのは、日露戦中・戦後の国家の要請に照応させるためであったことも事実である。「柴刈り縄ない草鞋をつくり」に始まり、各節末尾を「手本は二宮金次郎」（文部省唱歌）で結ぶ『二宮金次郎』が小学唱歌になったのも一九一一（明治四三）年^⑤であり、歌いつがれて第二次大戦に至る。このように、子供たちにとって二宮

金次郎は手本でありつづけた。

国民的模範人物である金次郎が教科書から抜け出して、聡明で可憐な姿を校庭に現したのは一九二八（昭和三）年以降である。薪を背負い、書を読む立像は画一的であるが、露伴の前掲書にはあるが修身教科書の挿し絵にはなかったものである。この銅像は明治神宮宝物殿に現存する、明治天皇愛重の金次郎像を手本にしたものである。また、ベストセラー作家であった武者小路実篤により『二宮尊徳』が一九三〇（昭和五）年に刊行され、一気に「二宮金次郎」ブームが到来するのである。¹¹⁾

2 「二宮金次郎立像」の誕生

「二宮金次郎立像」は、三代目慶寺丹長によって、一九二八（昭和三）年に誕生する。これは、裕仁（昭和）天皇即位御大礼記念として、各地の小学校に寄贈するために、明治天皇の愛用の「二宮金次郎立像」（岡崎雪聲作）を念頭に、二宮尊徳幼児の銅像を依頼したものである。顔は、尊徳の曾孫である徳（いさお）の少年時代の写真を参考に、また大きさはメートル法の普及もかねて、高さ一メートル（＝一〇〇センチメートル）とした銅像が完成した。岡崎雪聲作の「二宮金次郎立像」が、卓上用として四六・〇センチメートルのもので、右手に本をもち、左手で薪の背負紐をつかみ、股の辺りが膨らんだ作業着を着用し、右足を前に突き出しているものであるのに対して、慶寺丹長作「二宮金次郎立像」の特徴としては、上半身が逆の体勢（左手が本、

右手が背負紐）に、薪の背負に横棒が加わった上で、作業着はやや粗末な物になり、右足を前に突き出している。近代の歩行・行進の基本形として、上肢と下肢とが交互に突き出す瞬間を捉えている。すなわち、近世社会まで、日本人の歩行方だった同方向の上肢と下肢を突き出して歩く歩行方（「ナンバ」と呼ばれる）が、一九一〇（明治四三）年の岡崎雪聲作「二宮金次郎立像」に凶らずも刻まれているのに対して、尺貫法に対するメートル法を体現する「二宮金次郎立像」での可視化・認識化と学校・軍隊で体得させられる歩行・行進方が、この像に具体化されているのである。

この像は、戦前に約一千体も作られ、全国的に普及したが、戦時中にはほとんど供出させられてしまったといわれる。富山県高岡市は彼の銅像を一手に引き受けた所である。しかし、製作所も減り、たまにある好事家からの注文にこたえているにすぎない。そして現在、神奈川県小田原市報徳二宮神社境内に現存するものが、同社に奉納された第一号作品であり、同型の銅像は供出によりほとんど失われているなか、供出を免れた数少ない金次郎像である。また同社には、三代目慶寺丹長による三一・五センチメートルの小型の「二宮金次郎立像」も残されている。

以上の「二宮金次郎立像」の特徴を踏まえ類型化を行うと、岡崎雪聲作「二宮金次郎立像」に代表される明治型（左右対称の場合は鏡型）、慶寺丹長作「二宮金次郎立像」に代表される昭和型（左右対称の場合は鏡型）、明治型・昭和型どちらにも分類できない直立型または折衷

型・破壊型の三つの型に分けることができるのではないかと思われる。

全国のかなりの数の小学校の校庭に「二宮金次郎立像」が残されており、現在においてもなお、その建立が報道されている。卓近な例になるが、筆者が卒業した福島県西会津町立野沢小学校においては、モルタル像の明治鏡型の「金次郎像」が校庭の隅に置かれていた。一九三三（昭和八）年八月、福島県は旧野沢町を経済更生運動の教化町に指定した。地域の模範として五年後の一九三八年五月一九日に青銅製の「金次郎像」が同校に寄贈されていた。¹² また東隣村の尾野本小学校に全く同様の「金次郎像」が設置される。同年七月には、西隣村の群岡小学校にも「金次郎像」が設置されるが、総ての銅像が戦中の供出によって初代の「金次郎像」を失い、戦後になり石像を模した二代目のモルタル像が設置されたとされる。このモルタル像は下肢部分の弱さを補強するために、背後には切株が置かざるをえないものになる。

また報徳運動が展開した栃木県宇都宮市立中央小学校の「金次郎像」は、明治型であるが、同市立石井小学校のそれは昭和型との折衷である。両者ともモルタル石像であるために切株が存在する。¹³ また、福島県原町市立石神第一小学校は青銅像で昭和型であり切株はなく、同県相馬市立飯豊小学校は、モルタル像の明治鏡型であり切り株が存在する。どちらも一九三六（昭和一一）年頃製作の初代の「金次郎像」が戦時中に供出されたため一九五五（昭和三〇）年頃に再建されたものである。¹⁵ 他に、群馬県桐生市立西小学校はモルタル石像の明治型で切

株が存在し、同市立南小学校は石像の直立型で切株はない。近年、何者かにより足が破壊されている。また桐生市内小学校の「金次郎像」は、この二校を含む石像が三体で他の小学校は全て銅像であるのとこのとである。¹⁶

また小学校の校庭以外では、静岡県掛川駅前に岡崎雪聲作「二宮金次郎立像」を忠実に一九八七（昭和六二）年に再現した銅像が、米国ロサンゼルス（リトル・トーキョー）に一九八三（昭和五八）年に建立されたものと八重洲ブックセンター本店内に一九九一（平成三）年に設置されたそれぞれ昭和型に分類される「二宮金次郎立像」があげられる。

3 広島県呉市を中心とする「金次郎像」

次に二宮金次郎像の設置・残存状況を、広島県を中心に呉市、安芸郡音戸町・倉橋町・蒲刈町・下蒲刈町、豊田郡川尻町・安浦町、佐伯郡能美町・沖美町・大柿町、以上一市九カ町の瀬戸内海を臨む沿岸部と島嶼部の調査から見よう。¹⁷ 周知のように、この地域は広島市に置かれた広島鎮台（のち第五師団）との関係から一八八九（明治二二）年七月に第二海軍区鎮守府が呉に開庁、以後、軍港所在地としての呉とその周辺の町村には軍事施設が次々と設置され、日本海軍の要塞として重要な役割を果たしていた。それ故、一九四五（昭和二〇）年三月から八月にかけての米軍機による空襲と同日一五日の敗戦、一〇月六日から開始されるアメリカ第六軍第一〇軍第四一師団の進駐と占

【表5】広島県安芸郡蒲刈町の「金次郎像」

番号	学校名	素材	類型	切株
1	蒲刈小学校	石像	明治鏡型	有
2	向小学校	石像	明治鏡型	有
3	旧宮森小学校	石像	昭和型	無

【表6】広島県豊田郡川尻町の「金次郎像」

番号	学校名	素材	類型	切株
1	川尻小学校	石像	明治直立型	有

【表7】広島県豊田郡安浦町の「金次郎像」

番号	学校名	素材	類型	切株
1	野路中切小学校	青銅像	昭和自立型	有
2	内海小学校	青銅像	折衷型	有
3	安登小学校	石像	明治鏡型	有
4	野路北小学校	石像	折衷型	無
5	三津口小学校	石像	昭和型	無

【表8】広島県佐伯郡能美町の「金次郎像」

番号	学校名	素材	類型	切株
1	鹿川小学校	石像	明治鏡型	有
2	高田小学校	青銅像	昭和破壊型	有
3	中町小学校	石像	明治鏡型	有

【表9】広島県佐伯郡沖美町の「金次郎像」

番号	学校名	素材	類型	切株
1	沖小学校	青銅像	昭和型	無
2	三高小学校	石像	明治鏡型	有

【表10】広島県佐伯郡大柿町の「金次郎像」

番号	学校名	素材	類型	切株
1	大君小学校	石像	昭和型	無
2	大古小学校	青銅像	昭和型	無
3	柿浦小学校	青銅像	昭和型	無
4	飛渡瀬小学校	石像	明治鏡型	有
5	深江小学校	石像	明治鏡型	有

【表1】広島県呉市の「金次郎像」

番号	学校名	素材	類型	切株
1	荒神町小学校	石像	明治直立型	有
2	仁方小学校	石像	明治鏡型	有
3	両城小学校	石像	明治鏡型	有
4	吉浦小学校	石像	明治鏡型	有
5	上山田小学校	石像	明治鏡型	有
6	阿賀小学校	石像	明治直立型	無
7	延崎小学校	石像	明治直立型	無
8	五番町小学校	石像	明治鏡型	有
9	宮原小学校	石像	明治鏡型	有
10	郷原小学校	石像	明治鏡型	有
11	辰川小学校	石像	明治鏡型	有
12	警固屋小学校	青銅像	昭和直立型	有
13	昭和中央小学校	木像	明治直立型	無
14	坪内小学校	石像	明治型	有
15	二川児童館	石像	明治直立型	無

【表2】広島県安芸郡音戸町の「金次郎像」

番号	学校名	素材	類型	切株
1	音戸小学校	青銅像	昭和型	無
2	高須小学校	石像	昭和型	無
3	波多見小学校	石像	昭和型	無
4	奥内小学校	石像	明治鏡型	有
5	早瀬小学校	青銅像	昭和型	無
6	田原小学校	石像	折衷型	無
7	渡子小学校	石像	明治鏡型	有

【表3】広島県安芸郡倉橋町の「金次郎像」

番号	学校名	素材	類型	切株
1	明德小学校	青銅像	明治鏡型	有
2	宇和木小学校	石像	昭和型	無
3	須川小学校	青銅像	昭和直立型両手持	有
4	尾立小学校	石像	昭和型	無
5	旧大向小学校	石像	昭和破壊型	有
6	旧西宇土小学校	石像	昭和型	無
7	旧長谷小学校	青銅像	昭和型	無
8	旧海越小学校	石像	昭和型？	無？

【表4】広島県安芸郡下蒲刈町の「金次郎像」

番号	学校名	素材	類型	切株
1	旧大地蔵小学校	石像	明治鏡型	無
2	旧三之瀬小学校	石像	昭和型	無
3	旧下島小学校	石像	明治鏡型	有

領、その後一九五五（昭和三〇）年一月までの英連邦軍の進駐による地域社会に投げかけた市民生活の変容を観察できるフィールドである。

まず【表1】の呉市内には二〇〇〇（平成一二）年四月現在、小学校が三八校あり、内一校が休校し、一四校に「金次郎像」が存在する。11は、一九三一（昭和六）年に同校創立二〇周年品として寄贈されたものであり、14は、一九三五（昭和一〇）年に寄贈されたものである。

また13は、唯一の木像の「金次郎像」で、元は昭和西小学校に所蔵されていたものである。さらに15は、児童館に設置された珍しいものであるが、一九六九（昭和四四）年に建造された新しいものである。それぞれの「金次郎像」台座には「二宮尊徳像」や「勉学」と記されているものが多い。

次に安芸郡に移ると【表2】の音戸町は、七つの小学校すべてに「金次郎像」が設置されており、1は、一九五六（昭和三一）年製のものである。台座には1の「勤儉力行」が突出しており、「二宮尊徳像」または「尊徳」とするものが多い。【表3】の倉橋町には、この他に「金次郎像」が存在しない倉橋・重生・東・鹿老渡・鹿島の五小 schools があった。7は、一九三九（昭和一四）年一月に寄贈されたもので戦時供出を免れたものであり、神奈川県小田原市報徳二宮神社境内に現存する銅像と並んで貴重なものである。8も同じ年に寄贈されたものだが、同校の東小学校への併合に伴う廃校によって、銅像本体が破壊されている。また2は、二重瞼の「金次郎像」として、地元

人気を集めている。【表4】の下蒲刈町では、「金次郎像」を設置していた三つの小学校が一九九九（平成一二）年四月に、下蒲刈小学校に統合された。ちなみに3は、一九八五（昭和六〇）年に製作されたものである。【表5】の蒲刈町では、大浦・宮森の二つの小学校が合併

して、1の蒲刈小学校になった。1は、旧大浦小学校に設置されていたものであり、3は旧小学校地に新設された児童館に残されている。

さらに豊田郡の【表6】川尻町には、町内に小学校が1校あるのみである。町内唯一の小学校である川尻小学校の「金次郎像」は、呉市1の荒神町小学校と類似しており、製作者が同一である可能性が高い。

【表7】の安浦町には、6校中5校に「金次郎像」が設置されている。唯一「金次郎像」が存在しない野路北小学校には、男女児童像が設置されている。

最後に佐伯郡の【表8】能美町には三つの小学校があるが、全小学校に「金次郎像」が設置されている。2は、身長二メートルを越す巨大なものである。【表9】の沖美町には二つの小学校があるが、両小学校に設置されている。1の「金次郎像」は、腰に斧を付けており、2は一九四〇（昭和一五）年に製作されたものである。【表10】の大柿町には五つの小学校があるが、すべての小学校に設置されている。1の「金次郎像」は、大君小中学校で設置していたもの、2は一九五八（昭和三三）年四月製のもの、3は同年五月に創立八〇周年を記念して製作されたものである。台座は、「二宮尊徳像」が多い。

以上、広島県呉市を中心とした地域での検討によっても、「金次郎

像」は様々なヴァリエーションをもち、戦時中に供出された銅像の再建は、昭和三〇年代を中心に展開していることがわかり、今日に至るまで小学校における原風景として存続している。

4 大阪商業大学谷岡記念館前の「金次郎像」

大阪商業大学の正門を入り谷岡記念館左側の植え込みのなかに、「二宮金次郎立像」は現存する。周知のように小学校の校庭の「金次郎像」は、けっして珍しいものとはいえないが、大学に「金次郎立像」が存在するのは、全国に稀な事例だと思われる。この「二宮金次郎立像」は、どのような経緯で建造されたのであろうか。この間の事情を示す資料を掲げてみよう。

「昭和十三年学校行事

(中略)

九月一日 第二学期始業式。山田楊之助校長が、全校生徒に就任の挨拶。本月より毎月、一日、十一日、二十一日には、時局を認識し前線将兵の労苦を思い、職員生徒の昼食は、粗食弁当(日の丸)を持参することと伝達。明日より、下駄履き通学を許可する。『消費節約』のため、現在所時している皮靴をできるかぎり長期間使用する事。

(中略)

一〇月一日 冬服着用。『制服の新調禁止』の大阪府指令を生徒に伝達。一九日 靖国神社臨時大祭。午前十時講堂で遙拝式を挙行。

午後一時、二宮尊徳石像除幕式。学校神社神殿前の礎石に、二宮尊徳像が建造され、九月二十三日に完成。本日、除幕式を挙行。この石像は父兄会常任委員から学校に寄贈された。常任委員(イロハ順)今井実三、石田亀雄、大槻三蔵、川村喜二郎、田中豊三、小森清造、島津鶴重、新坊音治郎(以上) 二二日 四年生全員、長瀬公園予定地整地、勤労奉仕。二四日 五年生全員、檀原神宮勤労奉仕(建国奉仕団第三回) 五年生は卒業を来春にして、次の信条を神前で奉唱した。『我等ハ強靱ナル心身ヲ鍊成シ誓ッテ国家ノ良材タランコトヲ期ス』二七日 本日より二十九日まで中間考查(第一本科)。試験終了後講堂で日本軍の武漢三鎮占領祝賀式を挙行。¹⁸⁾

以上、みられるように大阪商業大学「二宮金次郎立像」は、本学がまだ大阪城東商業学校と呼ばれていた一九三八(昭和一三)年一〇月一日、神社神殿前の礎石に建造されたものである。前年七月の日中戦争の開始と共に本学がおかれた事情は、商業学校を非生産的(無益)な物として、生産的(有益)と見なした工業学校への改組を指導していた政府や大阪府・布施市の厳しい学園統制の下で行われたものと想像される。「昼食は、粗食弁当(日の丸)を持参」・「現在所時している皮靴をできるかぎり長期間使用」・「制服の新調禁止」の大阪府指令・数々の「勤労奉仕」に示され、『我等ハ強靱ナル心身ヲ鍊成シ誓ッテ国家ノ良材タランコトヲ期ス』の「奉唱」を具現化するものとして、「二宮金次郎立像」は建立されたのである。

我が学園の「二宮金次郎立像」は、高さ一・一五メートル(一一五



大阪商業大学谷岡記念会前『二宮金次郎立像』

センチメートル)の白御影石で造られており、【写真】にみられるようにその姿勢は、一九一〇(明治四三)年の岡崎雪聲作「二宮金次郎立像」を左右対称にしたもの、すなわち左手に本をもち、右手で薪の背負紐をつかみ、股の辺りが膨らんだ作業着を着用し、左足を前に突き出している。これは、近隣の小学校にある「金次郎像」との違いを意識した上で、明治神宮宝物館蔵岡崎雪聲作「二宮金次郎立像」を故意に左右対称にしたものであるか。姿勢だけからすれば先に掲げた栃木県宇都宮市立中央小学校にある石像と同じであるが、明らかに重量感が存在する。台座の礎石は縦横一メートル弱、高さ〇・五メートルの自然石で、裏側に父兄会常任委員であり、この像の寄贈者である今

井実三・石田亀雄・大槻三蔵・川村喜二郎・田中豊三・小森清造・島津鶴重・新坊音治郎諸氏の七人の名がイロハ順に刻まれている。常任委員の人々はこの「金次郎像」に何を託そうと考えられたのであろうか。

大阪商業大学谷岡記念館前の「二宮金次郎立像」は、戦中戦後の混乱の中、商業学校に対する指導統制が強化され、勉学の場合「銃後の守り」として位置付けられるなか、その混乱期を耐え抜いた大阪城東商業学校(↓布施工業高校)が大阪城東商業大学・大阪商業大学へと発展して行く姿を六二年間にわたり見守り続けてきたのである。そして、これからも本学の発展を見守り続けて行くことだろう。

むすびにかえて

本稿で述べてきたように「二宮金次郎立像」が、全国の学校の校庭に次々と建てられていったのは昭和に入ってからのことである。その背景には一九〇四(明治三七)年以降の国定教科書に修身そして終身の模範としての少年金次郎が数多く登場するようになったことがあげられる。また、学校内の銅像・石像はその学校の卒業生や職員の寄附によって建てられたもののほかに、地元の卒業生の出征を記念して建てられる場合も多くあった。それゆえ、戦後は一転して、その銅像が忌み嫌われ、顧みられなくなってしまった時期もあったのである。しかし、二宮尊徳が戦後まもない一九四六(昭和二一)年三月に、日本銀行券壹圓札として発行され、翌年四月には、宇野浩二の小説『二宮

尊徳』（桜井書店、一九四七年）が刊行されていることは、GHQですら理論的には軍事動員のプル要因を見いださなかったのではなからうか。「二宮金次郎立像」が、地域社会のセンターとして機能した小学校の原風景として、多くの人々の「記憶」の中の大きな部分を占めていることを、私は感ぜざるをえなかった。校庭の片隅に金次郎像が残る小学校は少なくなく、新たにより立派に建てられる「負薪読書」姿の「二宮金次郎立像」も現れているのである。

翻って、近年の歴史研究においては、尊徳の仕法は領主的な立場から行われるものであっても、尊徳はあくまでも農民の生活の安定、もしくは農民の生産者としての立ち直りを目指していたということが指摘されている。さらに報徳仕法の中に、その農民の生活の安定のために展開された民衆的社会運動としての性格を見出し、こうとする見解も出されている。若い研究者の中には、報徳運動と世直し一揆を有機的に結び付けようとする動きも起こっている。もちろんこれが二宮尊徳自身の意図を離れるものであろうことは否定しない。

そして今日の状況から、二宮尊徳及び報徳運動を研究対象とする場合、国家主義的・帝国主義的国民再建の側面を強調する段階から、「地域破壊の危機」及び「精神的疲弊」に、二宮金次郎や報徳思想が幾度も蘇生したという史実を真っ正面から取り扱うべきではなからうかとも考えるのである。¹⁸⁾ 事実、不況になると尊徳は呼び戻される。松方デフレ・日露戦争・昭和恐慌・戦後、そして石油ショック後にも「二ノキン・ブーム」はあった。私たちの歴史学は、否定的・消極的

にでさえもこの事実を眼をそむけることはできないのである。

追記

本稿を執筆するうえで、福島県原平市立野馬追の里歴史博物館、原平市史編纂室、原平市深野・佐藤愛子家の皆さん、栃木県立歴史博物館・船木秋夫氏にお世話になった。末尾を以てではあるが感謝の意を表したい。

(1) 小田原藩に登用前後、誤って「金次郎」と記載されたため、以後、公文書では「金次郎」が用いられた。また、この時の諱は政行（まさゆき）であり、尊徳は幕府に登用された後の諱で、正式には「たかのり」と読む。また、一八九一（明治二四）年一月に従四位が追贈されると平朝臣尊徳曾我金次郎又は平朝臣尊徳二宮金次郎と表記される。なお、従四位とは、幕末の功臣・横井小楠と同格であり、正四位を追贈された佐久間象山のランク下に位置づけられる。

(2) 「仕法」とは、村や家の復興の方法を意味する。尊徳以前にも「御趣法」などとして、入百姓による人口増加策などの農村復興策が幕藩領主によって行われていた。その意味においては尊徳による仕法も従来の領主改革を踏襲したものと言えるが、それまでの改革と決定的に異なっているのは、独自の思想をよりどころとし、完成された様式を伴って実施されたことにある。そのことが尊徳による農村復興事業が特に「報徳仕法」と呼び慣わされるゆえんである。また、のちに「報徳仕法」が一種の社会運動的な性格をもって全国的に展開して行くことになる（池嶋和雄「こあいさつ」第五十五回企画展図録『二宮尊徳と報徳仕法』栃木県立博物館、一九九六年）。また報徳主義は、二宮尊徳が創唱した教えにもとづく思想と行動の体系である。至誠・勤勞・分度（自己の分限に応じた生活により余剰を生むこと）・推譲（分度）による生活により生じた余剰を他へ譲ること）を教義とし、報徳仕方により貧窮した家や荒廃した村のたて直しを行う報徳運動が各地

で展開し、報徳社と呼ばれる地方結社組織も拡大していった(海野福寿『日本の近代』日清・日露戦争集英社、一九九二年、二〇三～二二頁)。また本稿執筆に関しては、前掲奈良本辰也『二宮尊徳』、邱永漢・奈良本辰也『二宮尊徳』、『日本史探訪』第9集、角川書店、一九七三年)、守田志郎『二宮尊徳』(朝日評伝選2、朝日新聞社、一九七五年のち朝日選書、一九八九年)等を参照した。

(3) 富田高慶『報徳記』(岩波文庫、一九二八(昭和三)年、一七～八頁)。

(4) 二宮尊行・尊親一家が住んだ石神村(現、福島県原町市石神)では、旧二宮家住宅が村役場として使用されていた。また一九五五(昭和三十)年には、二宮尊徳一〇〇年忌に二宮家墓所も建立されている。さらに同地区深野の教育者であった佐藤精明家には、一八九六(明治二九)年に二宮尊親から贈られたと伝えられる二宮家家紋「石持地抜木爪」を付けた「二宮家甲冑」が残されていた他、「報徳関係書類」(絵葉書・新聞・雑誌・書簡他)〔佐藤弘毅、一九三五～三六(昭和一〇～一一)年〕福島県原町市深野・佐藤愛子家所蔵E一〇七〇、『斎藤高行先生事歴』(佐藤弘毅・相馬郡自治会・相馬郡翼賛会、一九四三(昭和一八)年一〇月二日)前掲E一〇七二、『相馬充胤公御事績』(猪狩裕祐、一九一九(大正八)年五月一日)前掲E一〇七三、「書簡」(一九二八(大正三)年三月一日、静岡県山下郡次郎より佐藤精明宛)前掲E一〇八一〇三、「報徳二宮神社絵葉書」前掲E一〇九九、「二宮翁桜町遺蹟」前掲E一〇〇〇、「二宮翁小田原」同上E一〇〇一、「報徳関係」前掲E一〇〇二、「報徳精神を学校教育に案」〔宇都宮商校、一九二八(昭和一三)年〕前掲E一〇〇三、「書簡」(一九二六(大正一五)年一月一日、興復社富田啓蔵他より佐藤精明宛)前掲E一〇〇八〇等が確認できた。

(5) 富田高慶『報徳記』(宮内省、一八八三(明治一六)年一二月)。

(6) 富田高慶『報徳記』(農商務省、一八八五(明治一八)年二月)。

(7) 富田高慶『報徳記』(大日本農会、一八九〇(明治二三)年)。その後、富田高慶が社長を、二宮尊徳孫の尊親が副社長をつとめた興復社の版本が一八九六(明治二九)年に出版されている。

(8) 内村鑑三著・鈴木範久訳『代表的日本人』(岩波文庫、一九九五年)。「内村は、農商務省から出た五百ペーシほどの『報徳記』を愛読し、人にも勧めている。…幸田露伴の『二宮尊徳翁』…にも目を通してはいるが、『アレ

は詰まらぬ本』と片付けている」前掲『代表的日本人』(同上書「解説」二〇〇～一頁)。

(9) それ以前に「にのみやせんせい は、まいばん、よなべ をしまひ、人の ねたあと で、べんきょいたされました。」〔第七課 にのみや きんじろう』修身教典 第二』文部省、一九〇〇(明治三三)年、一三頁)が発刊されている。この教科書の二二頁には、伯父万兵衛宅で皆が寝静まるのを見計らって、あかりがそとにもれないようにして本を読んでいる挿絵が描かれている。「尊徳の心には、古人の学問に対して『目明き見えず』すなわち字の読めない人間にはなりたくないとの思いが起りました。そこで孔子の『大学』を一札入手、一日の全仕事を終えたあとの深夜に、その古典の勉強に熱心につとめました。伯父は、…こっぴどく叱りました。…それ以後、尊徳の勉強は、伯父の家のために、毎日、干し草や薪を取りに山に行く往來の道でなされました」(前掲『代表的日本人』、八一～二頁)。

(10) 同一九一一(明治四三)年の他の小学校唱歌として、『日の丸の旗』(作詞/吉丸一昌、♪白地に赤く、日の丸染めて、『鳩』(文部省唱歌、♪ぼっ ぼっ ぼっ 鳩ぼっ 豆がほしいか そらやるぞ みんなで仲善く食べに來い)、『人形』(文部省唱歌、♪わたしの人形は よい人形、『かたつむり』(作詞/吉丸一昌、文部省唱歌、♪でんでん虫々 かたつむり お前のあたまは どこにある 角だせ槍だせ あたまだせ、『牛若丸』(文部省唱歌、♪京の五条の橋の上 大のおとこの弁慶は 長い薙刀ふりあげて 牛若めがけて切りかかる)、『桃太郎』(作詞/吉丸一昌、♪桃太郎さん 桃太郎さん お腰につけた黍団子 一つわたしに下さいな)、『池の鯉』(作詞/岡野貞一、文部省唱歌、♪出て来い 出て来い 池の鯉、『浦島太郎』(文部省唱歌、♪昔々浦島は 助けた亀に連れられて 竜宮城へ来て見れば 絵にもかけない美しさ、『案山子』(文部省唱歌、♪山田の中の一木足の案山子 天氣のよいに 蓑笠着けて、『紅葉』(作詞/高野辰之、♪秋の夕日に 照る山紅葉 濃いも薄いも数ある中に、『雪』(文部省唱歌、♪雪やこんこ 霰やこんこ 降っては降っては ずんずん積もる)等の名曲がある。

(11) 武者小路実篤『二宮尊徳』(大日本雄弁会講談社、一九三〇年、のち角川文庫に収録)。武者小路実篤は、このシリーズで他に『孔子』・『西郷隆盛』・『楠木正成』・『大石良雄』・『釈迦』・『一休』・曾呂利・良寛』を著している。

この後、佐々井信太郎『二宮先生の事業と遺跡』（二宮尊徳偉業宣揚会、一九三五年）・同『二宮尊徳伝』（日本評論社、一九三五年）、井上角五郎『二宮尊徳の人格と思想』（一九三五年）、飯田栄太郎『報徳精神と其の実行』（一九三八年）、高須虎六『二宮尊徳の思想と行績』（一九三六年）、加藤仁平『二宮尊徳と皇道報国』（弘文堂、一九四〇年）、下程勇吉『天道と人道——二宮尊徳の哲学——』（岩波書店、一九四二年）・同『二宮尊徳』（弘文堂、一九四二年）、菅原兵治『野の英哲 二宮尊徳』（偕成社、一九四二年）、中国・北京においても田中宗太郎『報徳要記』（一九四四（康德一一）年）等が出版される。

(12) 『野沢小学校沿革史』（福島県耶麻郡西会津町立野沢小学校蔵）。

(13) 『群岡小学校沿革史』（福島県耶麻郡西会津町立群岡小学校蔵）。

(14) 栃木県立博物館第五十五回企画展図録『二宮尊徳と報徳仕法』（栃木県立博物館、一九九六年、一一一頁）。

(15) 野馬の里歴史民俗資料館第九回企画展・図録第七集『相馬中村藩の御仕法』（野馬の里歴史民俗資料館、一九九七年、一五頁）。

(16) <http://www.sunfield.ne.jp/~kawasina/hoby/kinjiroschool/kiryu/kiriwest.html>

(17) <http://www.urban.ne.jp/horoyo/nino-kan/nino-kin-index.htm>

(18) 谷岡学園年史編纂委員会編『谷岡学園五十年史』（学校法人谷岡学園、一九七八年、一八四頁）。この原典は、『城東』（大阪城東商業学校校友会誌、一九三九年）である。

(19) 早田旅人「報徳仕法の展開と構造——野州桜町仕法の検討から——」（第五二回 民衆思想研究会報告 於／早稲田大学 二〇〇〇年二月一六日）などを参照。

(20) それでも報徳運動が二宮尊徳の直系師弟としては、傍流とされる岡田佐平治・良一郎親子によって担われた点、また岡田良一郎の二人の息子である岡田良平（一九〇七（明治四〇）年 京都大学総長、一六・二四～二七（大正五）年、同二三（昭和二）年 文部大臣）及び一木喜徳郎（一八九四（明治二七）年 東京大学憲法国法学担当、一九一四（大正三）年 文部大臣、一五（大正四）年 内務大臣、一七（大正六）年 枢密顧問官、三四（昭和九）年 枢密院議長）が教育行政を担っている点、すなわち岡田良平及び一木喜徳郎が国家主義的官僚・政治家として担った公教育・社会教育の拡充と国民強化促進の両側面を相互に補充していた点には充分留意する必

要があるだろう。